

寄稿

一方を聞いて決めつけるな!

道路特定財源を例に政策論争を考える

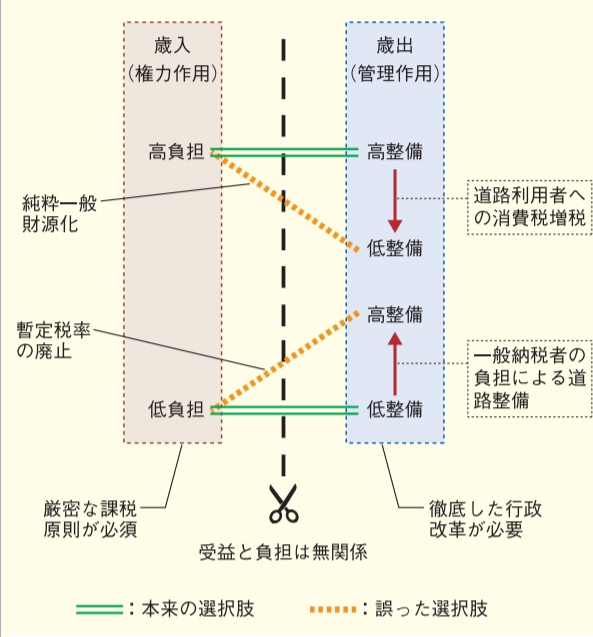


商学部教授 太田 和博

「下がったと思ったらまた上がる」。消費者を直撃した4月、5月の「ガソリン狂想曲」は記憶に新しい。連日のマスコミ報道で「道路特定財源の一般財源化」という問題を意識した人も多いことだろう。この問題を例に、交通政策を専門とする太田和博商学部教授から、報道を鵜呑みにせず、政策論争を深く考えるには、私たちがどのようにすることが必要か、寄稿していただいた。

知識深め、自ら論理的に考えよう

一般会計における道路関係の歳入と歳出



は、宮崎県における道路整備の重要性を強調しているため、「道路族」とみなされることがあるが、そうではない。「道路族」とは道路に関する「予算の硬直性」を指し、それが正しいかどうかを検証してみよう。第1の論拠は、道路だけに使うと決まっている税は負担力に応じて負担するの公平性に適している。一方、消費に関して

たと言っている。持は高い。しかし、一般財源化に関する議論は正しく行われなかった。東国原知事は「道路特定財源を一般財源化したら、課税の根拠がなくなる」と主張した。東国原知事は「道路特定財源を一般財源化したら、課税の根拠がなくなる」と主張した。東国原知事は「道路特定財源を一般財源化したら、課税の根拠がなくなる」と主張した。東国原知事は「道路特定財源を一般財源化したら、課税の根拠がなくなる」と主張した。

は、担税力に関係なく一律課税をすることが錦の御旗で消費税が導入されたことを考えると、担税力に基づくガソリンへの課税は正当化されない。ガソリン価格が1リットル50円であるとする、このうち税金は60円強であるから、本体価格は約90円である。この場合、ガソリン消費に課せられる税率は65%を超えている(つまり、消費税が65%)。高級アクセサリの消費税が5%であることを考えると、自動車ユーザーは課税差別を受けていることになる。東国原知事が「課税の根拠がなくなる」と言ったのは非効率であるので、民

無駄遣いはなくならない 課税の原則から見れば、道路特定財源の一般財源化は希薄な根拠しかなく、むしろ課税差別ということになる。しかし、この点は注目されなかった。注目されたのは、道路整備における無駄遣いである。談合などの不法行為や交通量の少ない所での不必要な高グレードの道路整備などが問題視されている。道路特定財源の一般財源化を減らすため、道路整備に回る資金を減らすと考えると、無駄を減らすと考

より深く考えるために 政策論争をより深く考えるためには、自らの知識を深め、論理的に思考する訓練をしなければならぬ。マスコミなどで一般に言われていることの真偽を自ら検討することが重要である。道路特定財源のこの点に興味のある人は、拙稿(太田和博「道路特定財源の一般財源化は間違いない」『エコノミスト』2007年7月10日号)および筆者の国会参考人招致での意見陳述(<http://www.stugiintv.go.jp/>)、参議院TV↓平成20年2月27日↓国土交通委員会)を参照されたい。



専修大学フィルハーモニー管弦楽団

第21回サマーコンサート

専修大学フィルハーモニー管弦楽団第21回サマーコンサートが6月26日、多摩市民館大ホールで開催された。専フィルは今年も多数の新人団員を迎えて、期待に違わぬフレッシュな力強い演奏だった。プログラムはハイドンの交響曲104番「ロンドン」を間に挟んでポロディンの作品を2曲「中央アジアの高原にて」「交響曲第2番」を取り上げ、古典派と国民楽派という構成でさまざまな聴き手が楽しめる内容。「中央アジアの高原にて」は管楽器のソロがところどころにあり、十分な練習と度胸が試されるが、繊細なメロディーをよく聴かせていた。「ロンドン」で、その様式美を堪能した聴衆に、「交響曲第2番」では重厚な響きで管弦楽のコンサートの楽しみを十分に伝えていた。特に中低音管楽器の元気のよさは特筆に価する。指揮の角田史さんはストイックな中にも要所を締める力強い指揮で情熱を感じさせた。600人の聴衆を集めた会場は満場の拍手に包まれ、アンコールは専フィルではおなじみのドボルザーク「スラブ舞曲第8番」。12月の定期演奏会ではシベリウス「交響曲第1番」を予定。会場がミューザ川崎ということもあり、重厚な響きに更に磨きをかけてほしいと期待が高まった。(S・K)

▲ 多摩市民館大ホールで力強い演奏を披露する専フィルメンバー (写真提供・多摩スタジオ)